

□ ピアノ

真嶋雄大

2020年から全世界を席捲した新型コロナウイルスによる感染症（COVID-19）は2022年に至っても終息するどころか、感染者数は増減を繰り返して、クラシック業界はその惨禍に苦しめられてきた。第二次世界大戦以来の未曾有な厄難ではあるが、それでも音楽の力は偉大だ。オンラインでの活動など、音楽を供給、或いは享受する手法を試行錯誤して活路を見い出している。とはいえ生での演奏体験に勝るものはなく、ようやく海外からのオーケストラやアーティストも来日公演が可能になるなど、ピアノ・コロナへの回帰に光が差し込み始めた一年であった。

鍵盤関係もその例に漏れず、外国人ピアニストが数多く日本の土を踏んだ。3月にはセルゲイ・ババヤン、パーヴェル・ネルセシアン、アレクサンドル・メルニコフ、アンドレアス・シュタイアーが、5月にはチャイコフスキー国際コンクール（以下コンクールを省略）の覇者バリー・ダグラスが、6月にはかつて大ブームを巻き起こしたものの病氣治療のために9年間戦列を離れたスタニスラフ・ブーニンが復活の烽火を上げた。

5月にはアンジェラ・ヒューイットがJ.S.バッハの鍵盤のための独奏曲全曲演奏会「バッハ・オデッセイ（12回）」を完結させ、81歳のマルタ・アルゲリッチが水戸室内管とシューマンの協奏曲で共演、6月にはコンスタンチン・リフシツがJ.S.バッハ「トッカータ全曲」と「音楽の捧げ物」による重厚なりサイタルで圧倒し、ショパン国際第2位のアレクサンダー・ガジェヴ、同第3位のマルティン・ガルシアン・ガルシア、またチャイコフスキー国際優勝のアレクサンドル・カントロフも気を吐いた。7月には85歳のホアキン・アチュカロが元気な姿を見せ、8月にはともにアジア人でのショパン国際覇者チョン・ソンジンとダン・タイ・ソンが高度なピアノイズムを示し、11月にはピエール＝ロラン・エマルがメシアン「鳥のカタログ」全曲を演奏、アンドラーシュ・シフは、事前のプログラム未発表の謂わばレクチャー・コンサートで聴衆を魅了し、ミシェル・ダルベルト、イゴール・レヴィットというフランス勢も高い評価を得た。そして12月には直近のショパン国際優勝者のブルース・リウのりサイタルも行われたのである。

一方で日本人ピアニストも大いに活躍している。若手では、クララ・ハスキル国際優勝、チャイコフスキー国際第2位の藤田真央がルツェルン音楽祭に国際的デビューを飾り、全世界でモーツァルト「ピアノ・ソナタ全曲集」をリリース。グリーグ国際優勝の高木竜馬、ルービンシュタイン国際第2位の桑原志織、ロン＝ティボー国際優勝者の亀井聖矢、同第2位の務川慧悟、同第3位の實川風もそれぞれに大きく羽ばたいている上、阪田知樹や谷昂登、デビュー10周年の牛田智大、東大出身でユーチューバーとしても活動する角野隼斗、2台ピアノのアン・セット・シス（山中惇史&高橋優介）などが積極的な活動を展開、多くのファンを獲得している。

もう少し上の年代層であれば、小菅優や河村尚子は言うに及ばず、J.S.バッハ「ゴルトベルク変奏曲」をライフワークとするデビュー20周年の高橋望は独自の道を歩み、同じデビュー20周年の上原彩子は令和4年度文化庁長官表彰を受けた。また人気ピアニストの横山幸雄はデビュー30周年を迎え、ジャズピアニストの山下洋輔とのジャンルを超えた共演も話題となった。同様に指揮者としても活動する鈴木優人も山下との共演経験を持つ。

また清水和音はソロ、コンチェルト、室内楽などに八面六臂の活躍を示し、小山実稚恵はヴィオラの川本嘉子とのデュオや、新たにコンチェルト・シリーズ「以心伝心」をスタートさせ、田部京子は吉松隆がシューベルト「ピアノ・ソナタ第21番D960」をピアノ協奏曲に仕立てた協奏作品を藤岡幸夫指揮東京シティ・フィルと共演、新たな視野を切り拓いて優れた境地を示し、有森博はロシアのピアノ作品を扱う「ロシアの玉手箱」シリーズを続行している。

また私事で恐縮であるが、筆者がプロデュースするバーゼンドルファー・ジャパンの「美女と野獣のトーク・コンサート」において、「斎藤雅広メモリアル・コンサート」が開催され、2021年に急逝した故人と親交の深かった小川典子、三船優子、堀越彰（ドラムス）、若林頭と鈴木理恵子（ヴァイオリン）、松本和将、須藤千晴が駆け付け、思い出の曲などを演奏して故斎藤雅広を偲んだ。同様に、4月には安川加壽子生誕100年を祝う記念演奏会が東京文化会館で行われ、平尾はるな、浜口奈々、岡本愛子、井上二葉ら直系の弟子たちが特別な想いで安川の大きな功績を再認識していた。

さらに巨匠たちも相変わらずエネルギーだ。寺田悦子は夫君渡邊規久雄とのデュオの他、ベートーヴェン「ソナタ第30番」などのリサイタルを、田嶋悦子は室内楽の他、シューベルト最期の3つのソナタを、そして館野泉は左手ピアノのためのリサイタルや女優草笛光子の朗読とコラボレーションしたコンサートで聴衆に感銘を与えた。

また第12回ショパン・フェスティバル2022が開催され、エヴァ・ポブウォッカや伊藤恵らの他、日本の新鋭が多数出演、今回のテーマはポロネーズであり、表参道カワイパウゼを舞台にレクチャーやコンサートなど多彩なプログラムに詩情溢れる演奏を繰り広げた。そのパウゼでは、日本に居を移したパスカル・ドゥヴァイヨンの講座も濃密な内容で大人気となっている。

コンクールや受賞関係なども顕著だった。2月にはイギリスのヘイスティング国際ピアノ協奏曲コンクールで森本隼太が優勝、アイルランドで行われたダブリン国際ピアノコンクールでは、黒木雪音が第1位（日本人初）、古海行子が第2位と日本人がワンツー・フィニッシュ、日本人のグレードの高さを知らしめた。日本においては、第9回野島稔よこすかピアノ・コンクールで「ゴルトベルク変奏曲」を弾いた本堂竣哉が第1位、仙台国際コンクールピアノ部門では第1位にルウオ・ジャチン（中国）、第3位に太田糸音、第33回国際古楽コンクール鍵盤部門の優勝は加藤美季、第91回日本音コンピアノ部門優勝は小嶋早恵、第20回東京音楽コンクール優勝者は中島英寿という結果を得た。

また第33回高松宮殿下記念世界文化賞にクリスティアン・ツイメルマン、第48回日本ショパン協会賞には三浦謙司が輝き、ショパンコンクールに第4位入賞した小林愛実は出光音楽賞を受賞した。

他方で、計報も世界を駆け巡った。もっとも衝撃的であったのは、ラドゥ・ルプーが4月17日、スイスのローザンヌで76歳の生涯を閉じたことで、さらにニコラ・アンゲリッシュもパリで4月18日、51歳の若さで鬼籍に入った。またアンネローゼ・シュミットは3月10日に85歳で、アレクサンドル・トラーゼは5月11日に69歳で、ラルス・フォークトは9月5日に51歳で他界している。それに第8回仙台国際コンクールの開幕直前、第1回から前回までピアノ部門の審査委員長であり、今回運営委員長の任にあった野島稔が5月9日に76歳で急逝したことも悔やまれる。心より冥福を祈りたい。

いずれにしても2023年こそはコロナ禍も雲散霧消し、誰もが気兼ねなく音楽を思い切り楽しめる日々が来ることを願ってやまない。